

中国語の品詞分類の歴史について

小林 立・孫 秋蓉

はしがき

中国は早くから言語の研究を始めている国の一つである。紀元前の昔に、古典を正しく読み取るために訓詁学が生まれ、紀元一世紀には文字学、そして少しくれて音韻学が興っている。これら言語学の研究成果は、すべて古典を正しく読解するという目的に直結していた。

独り、中国語の文法学に関する著作だけは、十九世紀末に初めて現われた。馬建忠の《馬氏文通》(1898年)は、ラテン語の文法書をモデルにして書かれた中国における最初の文法学の書物であるといえる。

何故、中国語において独り文法学は萌芽の状態が長期にわたって続いたのか。中国語には、西欧語のような形態変化という特徴が存在しない。従って、中国語においては、古典を正しく解釈するために、漢字の意義、形態、音韻についての研究が重要な社会的意味をもった。中国語の文法研究は、訓詁学、文字学、音韻学の諸著作の中に、断片的に散見されることとなり、体系的文法学として樹立されることはなかったのである。それは、中国語という言語のもつ特徴に基づくものであり、言語への関心の在り方が異なっていたからであった。

従ってまた、形態変化のあるラテン語文法の枠組みの導入に始まった中国語の文法研究は、その影響を大きく受けている。そして、時間の経過と共に、ラテン語文法から英文法へとその模倣の対象が移行するにつれて、文法研究の流れも、品詞論から統辞論へと移っていった。西欧の文法学を模倣し、導入することに始まった中国語の文法学は、やがて中国語それ自身の特徴に基づいた文法学の創造へと懸命の努力がはらわれた。模倣に反対し、革新が宣言されてから、中国語独自の文法学の樹立は、遂に1930年代後半から始まった。

中国語の文法研究は大まかに四つの時期に分けられる。

(一) 萌芽期……紀元前～1897年

(二) 導入期……1898年～1935年

(三) 革新期……1936年～1949年

(四) 発展期……1949年～

尚, テキスト及び参考文献としては主として, 龔千炎著, 鳥井克之訳《中国語文法学史稿》関西大学出版部1991年を使用している。

(一) 萌芽期(紀元前～1897年)

中国では古代から中国語の品詞分類の研究が始まっている。例えば荀子(前353～前255)は, 《正名篇》で名詞について, 初めて“名辞”を提出し, 事物の命名を“大共名”と“大別名”に分けた。また古代の經学者は動詞について自動詞と他動詞の違いを知っていた。

古典を正しく読解するには, 単語の意味を知らねばならないが, 単語には意味のある単語と意味のない単語, つまり文法的意味しかもたない単語とが存在しており, この後者の研究が必要なことに気付いていた。

かくて, 後漢の許慎は, 《説文解字》(A. D100)で, “詞”を虚詞と称し, 梁の劉勰と唐代の柳宗元は語気詞に対して分類をして, 虚詞分類を開創した。

宋代になると「実字」「虚字」という術語が明確に提唱されるようになった。「実字」には名詞, 更に形容詞も含んでおり, 「虚字」には動詞, 副詞, 前置詞, 接続詞, 助詞などが含まれる。

明, 清両代になると虚字の研究は大きく発展した。明代の盧以緯の《助語辞》(1592年)はそのもっとも早いものである。

清代の虚字に関する最も著名なものは, 劉淇の《助字辨略》(1711年)と, 王引之の《経伝释詞》(1798年)である。前者は, 宋・元以前の俗語の中から, 476語の虚字を収録して, 三十種類に分けた。後者は, 周, 秦, 両漢の古書籍の中から, 160語の虚字を収録して, 五十二種類に分けた。

中国語において「虚字」の研究が重視されたのは, 「虚字」は文法的範疇を表現するうえで重要なものであり, しかも「虚字」の多くは「実字」が虚字化して生れたものもあるので, 「虚字」が理解できなければ, 文意を正しく理解するこ

ともできないことになるからである。

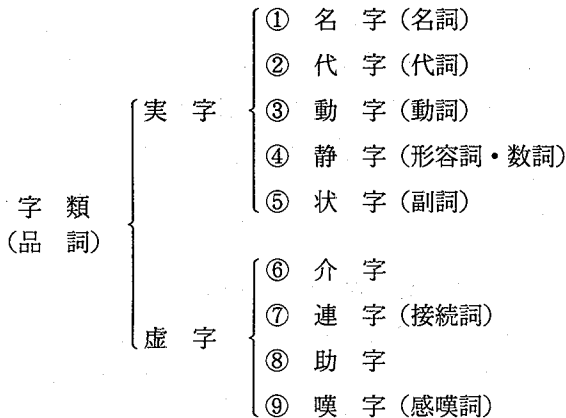
このように、中国語の単語を「実字」と「虚字」の二種に分けたことは、大きな意味をもつものであるが、その研究は古典の注釈のためのものであり、訓詁学、文字学また辞書を編纂するためのものであった。従って、中国語の文法研究という視点からの系統的な研究ではなかったという特徴に注意される必要がある。

(二) 導入期 (1898年～1936年)

1898年、馬建忠の《馬氏文通》が世に問われた。《馬氏文通》は中国における初めての系統的な中国語文法の著書である。馬氏は伝統的な中国の国語・訓詁学の考え方をを用いて、単語を「実字」と「虚字」の二種類に大きく分けた。資料として「論語」、諸子、国語、国策、春秋三伝、「史記」「漢書」などを用いた。「実字」と「虚字」について、ラテン語文法の枠組みを導入して、系統的に古代中国語の品詞を分類した。「実字」としては名字、代字、動字、静字、状字、の五種類をあげ、「虚字」としては介字、連字、助字、嘆字の四種類をあげている。

品詞分類の仕方は、ラテン語文法の枠組みを導入しているが、形態変化のない異質な中国語に、ラテン語文法の枠組みをそのまま適用することはできないので、《馬氏文通》は、単語の意味によって品詞分類することになる。単語を意味によって品詞分類すると、その単語は文の中で位置が移動するので、意味も変化することになる。かくて、その単語が主として現われる文成分を決定することによって、逆にその単語の品詞を決定するという手続きを採っている。こうして、単語はそれ自身では品詞は決定することができないので、文中においてのみ単語の品詞は決定されるという結論になった。つまり、「字無定類（単語には決まった品詞がない）」という結論になったのである。これは中国語の単語には、ラテン語文法にみられるような形態変化が存在しないため、単語の意味しかその據り所がないことからくる結論である。

《馬氏文通》の九品詞は以下の通りである。



注目すべきことは、馬氏が中国語には形態変化がないという特徴を指摘していることであり、中国語と西洋語との比較の中から、中国語に特有の「助字」と「介字」を発見していることである。《馬氏文通》は、中国語の品詞分類の理論と実践に対して、極めて大きな影響を与えて来たといえるのである。

次いで、1924年、黎錦熙の《新著国語文法》が出版され、大きな影響を与えた。黎氏の《新著国語文法》は、主として文の分析を基礎にして、文法を論じており、「文本位」の文法と称する所以である。「文本位」とは、文をまず六大成分に分けて、然る後、単語が文中において担当する文成分に基づいて、品詞分類を行うという手順がとられる。それは、西洋文法が品詞論から統辞論の重視へと大きく発展した潮流に沿っていることの反映でもある。黎氏は「意義」に基づいて単語を九品詞に分類し、更にそれらを五類にまとめている。すなわち「五類九品」とした。

- | | | | |
|---------|---------|----|-----|
| (1) 名 詞 | (2) 代名詞 | —— | 実体詞 |
| (3) 動 詞 | ————— | | 述説詞 |
| (4) 形容詞 | (5) 副 詞 | —— | 区別詞 |
| (6) 介 詞 | (7) 連 詞 | —— | 関係詞 |
| (8) 助 詞 | (9) 嘆 詞 | —— | 情態詞 |

黎氏の品詞分類を見て気をつくことは、中国の伝統的な「実字」「虚字」の大枠が消えていることである。これはネスフィールド氏の英文法を踏襲しているた

めである。英文法の八品詞に加えて、中国語の「助詞」を加えて九品詞に分類したわけであるが、この「助詞」は、馬氏が初めて「助字」として品詞を樹てているので新しい分類とはいえない。馬氏にくらべると、「実字」「虚字」という大枠の観念が消えているので、その点では、後退しているというべきかもしれない。

黎氏は中国語の単語について、「字」（語素）と「詞」（単語）の区別を明確にした。「字」とは「一つ一つの単字」のことであり、「詞」とは「一つの観念を表す語詞（単語または句）」のことであると定義している。

馬氏は品詞分類のことを「字類」と呼んだのに対して、黎氏は「詞類」という呼び方をして、語素と単語の区別をはっきりさせた。

《馬氏文通》（1898）と《新著国語文法》（1924）は、共に西洋文法を模倣した中国語文法の著作であるが、前者はラテン語文法に基づき、後者は英文法によっている。また《馬氏文通》は、文言文を研究資料としているのに対して、《新著国語文法》は、白話文を研究資料としている。研究資料の差に、学問的、社会的環境の推移が鮮明に反映されている。

馬氏も黎氏も共に品詞分類の基準を、単語の意味に基づいて行っている。それは西洋文法のように形態変化のない中国語においては、単語の意味に直接分類の基準を求めざるを得なかったからである。しかし、単語の意味を規定する必要があるため、それを文中の意味に求めるという方法を採用した。そのため、品詞論と統辞論が混乱する結果を招くことになった。つまり、一つの単語はことなった言語環境の中において表わす単語の意味は、異なっているし、単語の品詞の性質も変わってしまう。しかし、中国語の単語は、文中の位置が変わっても、形態には何の変化も見られない。従って、西欧文法にみられる形態変化に品詞分類の基準を求める限り、中国語には固定した品詞はないという結論に導かれていく。この点でも馬氏と黎氏は、方法論と結論において共通性を示している。

中国語は形態変化を目印にして、単語の品詞分類ができないために、単語の意味にたよるが、それも文中の位置によって意味が変わるために固定できない。そのため、遂に中国語には固定した品詞は存在しないという結論に達したのである。品詞論は文法学の重要な研究分野である。かくて、中国語の単語、特に「実詞」は品詞分類が可能か否か、また分類の基準は何であるかという問題が、研究課題

として浮上して来た。

(三) 革新期 (1936年～1949年)

1936年、王力は西洋文法の模倣に反対の声をあげ、中国語の特徴に沿った文法を樹立することを主張した。王力の主張に続いて、1938年から1943年まで、上海で文法革新論争が展開された。そして西洋文法の模倣に反対し、独立した中国語の文法体系を打ち建てることを宣言した。論争の重点は、中国語には品詞があるかどうか、また品詞分類をどう区分するかが問題となった。その代表的論者には、陳望道、方光焘、傅東華、張世祿、金兆梓、及び王力、呂叔湘、高名凱などであった。

中でも、方光焘の“広義の形態説”は、最も影響力をもった。方光焘は、単語の性質は必ずしも文中においてのみ弁別できるものではなく、単語と単語との相互関係や単語と単語との結合体においても、単語の性質を明確に認定することができることを主張したのである。この主張は、文中の“意味”によって、中国語の単語を品詞分類する従来の方法から脱却した画期的な方法論であったといえる。

中国語の単語には、形態変化が存在しないという特徴を踏まえると、単語を単独に取り扱おうと意味のちがいに頼らざるを得なくなるが、その単語を前後の結びつき方の特徴において調べるという方法論の発見である。方光焘は、そのような前後の結合の仕方の特徴を採り上げることを主張し、“広義の形態”と称した。

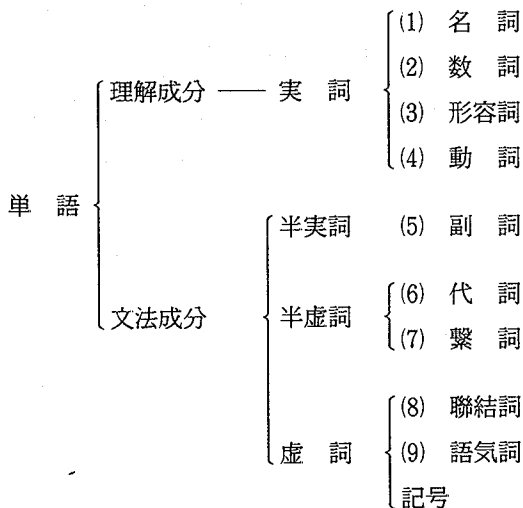
従って、方光焘の“広義の形態説”は、「文中の機能によって品詞を分類する」という黎錦熙の方法論を否定する重要なものであり、品詞を文成分と直結して分類する方法を否定するものであった。しかし、世界的にみると、西洋文学は品詞論から統辞論に重点が移っている時期と重なった。こうして、統辞論の影響を強く受けている黎錦熙の《新著国語文法》の考え方は、時代の流行にも乗っていることにより、依然、中国語文法学者の間に強い影響力を保持することができた。

文法学論争の後、王力、呂叔湘、高名凱等の中国語文法の創造的な代表的著書が、次々と世に問われたが、それらは世界の文法学の潮流の影響を受けて、品詞論よりも統辞論に重点をおくものであったため、中国語文法の研究も統辞論の観点から着手されるという傾向を示した。

こうして、文法学論争において現われた方光焘の“広義の形態説”に基づく中国語の品詞分類の提案も、時代の潮流に飲み込まれて、かき消されてしまったために、品詞分類の独創的な基準として採用されることなく終わってしまったのである。

例えば、王力は《中国現代語法》(1943年)の中で、統辞論を重視しているが、品詞分類についてはそれほど重視していない。王氏はヴェンドリエスの理論に基づき、品詞を“理解成分”と“文法成分”の二つに分けているが、それは意義によって「実詞」を分類し、文法的役割によって「虚詞」を分類したものである。それまでの文法書と異なるのは、実詞の分類において、「数詞」が品詞として独立したことである。また、王氏はイエスベルセンの《文法哲学》の理論に基づき、単語を「主品」「次品」「末品」の三つのランク(詞品)に分け、文法の分析では、この単語のランクを品詞と代替させることを主張し、“品詞はただ辞典の中だけでは存在しない”と考えたのである。

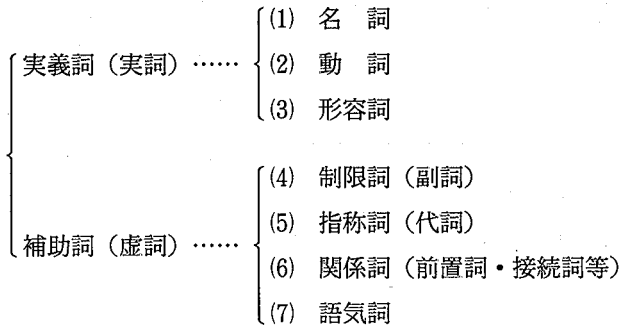
王力の品詞分類の体系は、以下の通りである。



尚、「記号」というのは、付加成分の一種である。「所, 打, 第, 阿, 老」, 「的, ル, 子, 頭, 們, 座, 得」, 「了, 着, 来着」などを指す。

呂叔湘の《中国文法要略》（1942～44年）は、中国語の統辞論を全面的に展開した独創的な著作であるが、品詞分類については王力の《中国現代語法》と大同小異である。呂氏も統辞論を重視し、品詞論はそれほど重要ではないと考えていた。品詞分類の基準は、“意味と機能が近いものを一類に帰納する”とし、主として“意味”によって品詞分類している。また品詞の文中における地位によって、「甲級」「乙級」「丙級」と分けているのも、イエスベルセンの影響がみられるし、王力の「三品説」と似通っている。

呂叔湘の品詞分類は、意味と役割りによって“二類七種”になる。



高名凱は《漢語語法論》（1948年）の中で、中国語には分類できる品詞がないと考えた。何故そのように考えるのかというと、高氏はフランスの言語学者ヴァンドリエスとマスペロの強い影響を受けていたからである。マスペロは、中国語は単音節語、孤立語であり、形態変化がないので、中国語には品詞の分類はないと考えていた学者である。

高名凱は、品詞というのは単語の文法的機能に基づく分類であるから、品詞分類する時には、意味、文法的機能、単語の形態という三つの基準を一体にして決定すべきであると考え、次のように主張した。

- ① 中国語の品詞は実詞と虚詞の二種類に分類される。
- ② 実詞はさらに品詞分類することはできない。しかし、文中における語句の機能によって、実詞を名詞、動詞、形容詞の三種類に分けることができる。
- ③ 虚詞は文法的工具であり、関係の意味を表わしており、いくつかの種類に分けられる。

高氏は品詞分類に関しては、先人よりも却って大幅に後退している。その理由は、西欧文法の形態変化に執着しすぎたからであろう。

以上のように、王力、呂叔湘、高名凱という中国を代表する三人の文法学者の文法体系は、それぞれ異なっているが、西欧の一般言語学を理論的な指針として研究活動を行っており、国際的な文法学界の潮流に沿っている点でも共通している。

初期の中国語文法は、品詞論を中心とし、統辞論については力を入れていなかったが、後にはその中心が統辞論に移行したため、品詞論は逆に軽視されがちになった。従って、品詞論に限ってみるならば、方光燾などの主唱した品詞分類の方法論は、結局、否定されて無視された。学界の議論が、品詞論から統辞論へと向っていたためであるが、王力、呂叔湘、高名凱などの独創的研究は、そのような時代の流れを背景とし、統辞論の分野において成し遂げられたものであるといえる。

かくて、軽視されていた品詞論については改めて見直す契機がやって来た。それは1940年代前後になると、アメリカ構造主義の影響を受けるようになったことによる。

陸志章の《国語単音詞語彙》の「序論」(1938年)と、趙元任の《国語入門》(1948年)である。

陸志章は、一個の言語成分が単語であるか否かは、もはやそれ以上に分析することが出来なくなるまで分析して得られた所の言語音声記号こそが単語である。相互に代替された成分は同一の品詞に属さなければならないばかりでなく、さらにその意味が互いに類似し合わなければならない。形式と意味の両面から言えば、それらはパターン全体の中において同等の地位を占めている、と述べた。

陸志章の品詞分類の方法は、「同形代替法」と称されるものであるが、これは構造主義そのものに他ならない。「同形代替」の原則を導入することにより、中国語の構語法研究は、開拓的な性質を帯びた研究となり、大きな発展をとげたのである。

趙元任の《国語入門》は、アメリカ記述言語学の方法を応用して中国語を研究した著作であり、その最大の特徴は構造から出発したことである。単語と単語の

結合関係に基づいて品詞を分類し、複合語の構造を分析した。これらは中国語の文法学史上それまで見られなかったものであるが、ヨーロッパ言語学が形態変化に重点をおくのと異なって、アメリカ言語学は、英語という形態変化の少ない言語を研究対象にしている所から生れた方法の違いが、中国語の文法研究には大きな意義があったと言えるに違いない。

事実、1930年代後半の方光焘の唱えた品詞分類の方法こそ、単語と単語との結合関係に着目していたのであり、それを“広義の形態”と称していたが、中国の文法学界では、無視されてしまった方法論が、アメリカ記述言語学の方法論が導入されることにより、事実上、改めて見直されることになったといえる。

(四) 発展期 (1949年～)

1953年～55年にかけて、中国の文法学界では、品詞分類について再度、盛んな論争が展開された。今回の論争の直接の契機は、スターリンの《言語学におけるマルクス主義の諸問題》における、「文法（品詞論、統辞論）は単語の変化法則と単語で文を作る法則の総体である」という指摘によるものであった。かくて、中国語にはインド・ヨーロッパ語のような語形変化が無いけれども、中国語それ自体の品詞論的構造と形態が存在するので、品詞論に対する研究を普遍的に重視すべきことが認識されるに至った。

論争の要点は

- (1) 中国語には形態があるのかどうか
- (2) 中国語には品詞の区別があるのかどうか
- (3) 品詞の区別があるとしたら、区別の基準はなにか
- (4) 品詞分類の基準は如何なるものであり、幾種類あるのか、どの基準を主なものとすべきか、であった。

これらの問題が人びとの関心を引きつけたのは、語法の学習熱が高まるにつれ、統一的な「学校文法」がうまれていないことから来る混乱があった。中国語の品詞分類をする際、文法学者によって説明の仕方はまちまちであり、初学者の当惑があった。

スターリンの論文を学習して、まず最初にソ連の中国語研究者コンラートが

《中国語について》という論文を発表し、それが中国語に翻訳されて紹介され、中国国内において極めて大きな影響をもたらした。すなわち、これまで、中国語には品詞の区別がないと考えていたが、コンラートの論文が発表されてからは、人びとの考え方に変化が生じ、中国語には品詞の区別があると考えようになった。コンラートの後に続いて、形式面から中国語の品詞分類の問題を解決しようとした。以前は品詞分類は意味によっていたものが、形態に依拠してよいということになったのである。

これに対して、高名凱は《中国語の品詞分類に関して》という論文の中で、品詞分類は不可能であるという従来通りの主張を述べた。その理由は、品詞分類には標識となる各種の品詞の特有の形式、即ち狭い意味での形態変化を基準とすべきであるが、中国語にはそういう狭義の形態変化は存在しないから、品詞を分類することはできないと考え、中国語の実詞の分類は存在しないと主張した。これに対して大部分の文法学者は反対を唱えた。

例えば、文煉・胡附は《品詞の分類を語る》の中で、中国語の形態変化を具体的に分析した。そして、中国語には狭義の形態が存在しており、たとえ狭義の形態がないとしても、広義の形態でもって品詞を区別できると主張した。

品詞論争は、中国語には品詞が存在するという方向で大方の意見が一致したので、どうやって品詞を分類すべきか、その基準についての議論に発展してゆく。

呂叔湘は《中国語の品詞に関する若干の原則的な問題について》の中で、多面的に中国語の品詞分類の基準を検討して、以下の五つの提案を行っている。

1. 文成分によって品詞を決定する分類法は貫徹できないものである。
2. 単語の重ね形式で以って品詞を区別することができるが、唯一の基準にすることはできない。
3. 鑑定字を品詞区分のための主要な基準として用いることには欠点があるが、補助的手段として、下位分類の区分には大いに役立つものである。
4. いかなる方法を用いて品詞を区分するにしろ、単語の意味は重要な参考基準となるものである。
5. 各種の構造関係によって品詞分類する。

以上、いずれの基準でも品詞分類はできるが、完全ではないので、どのように

組み合わせるかが問題となるとしている。

また、王力は《中国語に品詞が存在するのかという問題について》の中で、品詞分類の基準には、「語義」「形態」「統辞論」という三つの基準があるが、最初の「語義」は一定の働きをすることができるが、まず「形態」を優先的に活用すべきである。三つの基準の中では、「統辞論」が最も重要な基準であって、「形態」を使えないときには、「統辞論」の基準が決定的な役割を果たすと述べている。

今回の品詞分類の論争も最終的に一致した意見にはまともならなかったけれども、少なくとも幾つかの問題点を明確にすることができ、それが、中国における初めての「学校文法」の制定の共通の重要基盤になっていると思われる。共通の認識として挙げられる諸点は、

- (1) 中国語の品詞分類は可能であるとほとんどの文法学者が認めたこと。
- (2) 意味だけで品詞を区別することは不可能であること。
- (3) 品詞は単語の文法的な分類であって、単語の機能、単語の結びつき方などによって、分類するのが比較的合理的であること。
- (4) 中国語の文法的な分類は、総合的にいくつかの基準を使用すべきであって、一つの基準のみによってはだめであること、などであった。

むすび

馬建忠はラテン語の文法をモデルにして《馬氏文通》を書きあげた。西洋文法は、西欧語の特質に基づいて創られている。中国語には中国語の特質があり、西洋語とは異質の部分も多い。従って、中国語の品詞分類をする場合に、うまく合わない所が出て来るのは当然である。既成の西洋文法学の枠組みを導入しながら、中国語の特徴に基づいた文法学を創造しようとする格闘が、《馬氏文通》以降の数十年間にわたる文法研究の歴史といえるのではないだろうか。

《馬氏文通》について、黎錦熙の《新著国語文法》が書かれた。これは英文法をモデルにした中国語の文法書である。統辞論に重点をおくことにより、中国語の文法学の発展に大きく貢献した。

1930年代後半に、中国語の特徴に基づいた文法学の創造を唱える改革の気運が興って、王力、呂叔湘、高名凱といった代表的な文法学者の独創的な著書がうまれた。

1949年以降は、文法学への注意の喚起と学習熱の高まりによって、文法への関心は一般的な広がりをもつようになった。こうして中国語文法学は飛躍的に発展する環境を得たのである。

外国人には、西欧人にせよ、ロシア人にせよ、中国語を見る目は、いかに彼ら自身の立場でしか見れないかがよく分かる。中国語を彼ら自身の言葉に引きよせて、説明を加えようとするし、中国語それ自体の独自性を無視しようとする結果になるのは、ある意味では避けられない傾向である。しかも、中国人学者も、当初は既成の学問の枠組に縛られて、中国語をありのままに見れない状況がつづく。模倣を脱して、独自性をかくとくするには、それなりに時間的経過が必要であることは、王力、呂叔湘、高名凱らに代表される独創的な中国語文法学の出現によって証明される。

中国語文法学が中国語そのものの独自性に立脚して創造されるには、正に中国語そのものについての研究を通して、枠組みを発見する以外にないことが証明されて来たのである。

〈参考文献〉

- (1) 龔千炎著・鳥井克之訳《中国語文法学史稿》 関西大学出版部・1991年
- (2) 邵敬敏著《漢語語法学史稿》 上海教育出版社・1990年

附 記

孫秋蓉は、香川大学教育学部私費外国人留学生として、昭和63年(1988年)4月、幼稚園課程に入学し、田中吉資教授の研究室に所属して、専門課程を修めて、平成4年(1992年)3月に卒業した。その後、同年4月から香川大学教育学部研究生として、小林立研究室において、中国語の語法学史と中国語の語法について研究して、平成5年(1993年)9月末に帰国した。

本稿は、孫秋蓉が平成4年(1992年)10月にまとめた小論文《中国語の品詞の歴史について》(四百字詰十二枚)をもとに、小林が補足して出来たものである。